全カリ News Letter No.16
2002.2.13
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

聖路加看護大生、全カリへ参加

山本　博聖（ひろまさ）　理学部教授，2001 年度総合Ａ「宇宙の科学 1」担当

今年度から５大学間単位互換制度（f-campus）が始まり学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学、早稲田大学からの学生が、全カリをはじめいくつかの学部の授業に参加している。同時に聖路加看護大学生の全カリへの参加、後期からは立教女学院短期大学生の参加もスタートした。

自分の講義に他大学の学生が参加することは講義を担当する教員にとってはかなりのプレッシャーではないだろうか。これまで全カリ総合科目の経験がないわたしは今年度はじめて総合 A「宇宙の科学１」を前期１コマ火曜（1・2 時限）に担当することになった。最初の授業で「“宇宙”と名のっていますが“わたしたちの住むこの地球の大気”の話をします」と断りをいれてから始めた。終わりに簡単なコメントを書いて提出してもらい、早稲田大学と日本女子大の学生にあわせて聖路加看護大学生（登録は９名）が来てくれたことを知った。彼らの反応は「大気といえば地球環境とオゾン層」「地球温暖化に関心があります」「宇宙のことはやらないのですか」などさまざまであった。「聖路加では、地球のことを扱う講義がないので興味があります」と書いてあるコメントに勇気付けられるとともに、彼らの興味を引きつけ、さらに取扱った問題への関心と理解を一層深めることができるような講義ができるのか、という不安もあった。

全体で約 250 名の学生が登録をしていたが、1･2 時限授業のためか毎回の出席率はほぼ 6 割、学生数約 150 名のなかで、早稲田大と日本女子大そして聖路加看護大生の出席率は 8 割を越えていた。他大学学生が熱心に聞いてくれたことが数字に現れていた。

わたしの研究分野を足場にした地球大気に関する様々なテーマについて話をした。この分野は太陽系全体から地球表面までもカバーしている。数冊のテキストや文献そして新聞記事をもとに作成した OHP を用いて授業を進めた。使用した OHP はプリントにして配布し、毎回の授業の最後に提出されたコメントや疑問・質問に次週答える形式で進めた。プレッシャーを感じつつとにかく前期をやりぬき、ほっとするとともに、彼らにとって立教での授業はどう映ったのだろうか、立教大学のキャンパスで授業を受けることについても、どう感じたのだろうか、ととても気になった。聖路加看護大学生のなかから数名にお願いをして、前期火曜に開講されたいくつかの授業への感想などを含めて立教での授業参加について自由に書いていただいた。

彼らの感想を読んでいただく前に若干のデータを紹介しておく。聖路加看護大学からは１年次学生だけ（約 80 名、うち男子学生 2 名）が、またカリキュラム上の関係で１年次在籍者その半数が前期、残りの半数が後期に、火曜日開講の全カリ科目だけに参加する。初年度にあたる今年度前期は、火曜日 1・2 時限 14 名、3・4 時限 19 名、午後 5・6 時限 14 名、7・8 時限 1 名の合計 24 名の登録があった。また、それぞれの時限における登録科目数は 2 科目、5 科目、5 科目、1 科目で、登録単位数のべ 48 のうち取得単位数 42、単位取得率 87.5%（f-campus 学生の単位取得率は 65%）と好成績である。

聖路加看護大学からの全カリへの参加が今後とも同じ規模で続くのかどうかは今年度授業に参加した彼らの意見や感想に影響されることは間違いないものと思われる。今回は好意的なコメントを寄せてくれているが、今後とも立教生だけでなく他大学学生からも魅力あると受け止められる講義を提供しつづけたいと願っている。

聖路加看護大学は、１９２０年、米国聖公会の宣教医ルドルフ・Ｂ・トイスラーにより、アリス C. セント・ジョンの協力のもと、聖路加国際病院付属高等看護婦学校として築地に設立された。１９２７年、聖路加女子専門学校となり、看護学校では、日本で唯一の最高教育機関（本科・研究科の４年制）として認可される。１９５４年、聖路加短期大学（３年制）となる。１９６４年、聖路加看護大学の名称で、日本初の看護学部４年制教育を開始。１９８０年、全国で２番目、私立大学で初めての大学院修士課程を、また１９８８年には、看護学研究科として日本初の大学院博士課程を設置。今年度からは、男女共学となり、立教大学との単位互換制度も開始された。聖路加は、福音記者聖ルカのことで、医者であったということから、医療の守護聖人として、海外ではその名（St. Luke）を冠する医療機関は多い。また、聖公会関係学校のひとつとして立教とのかかわりも深い。

目　次

聖路加看護大生、全カリへ参加……山本　博聖（1）
鈴木佑佳、西岡沙織、豊田陽子（2）
デジタル映像教材作成の実際……舛谷　鋭（3）
英語海外文化研修レポート……池上俊彦（4）

立教大学の授業に参加して

聖路加看護大学１年
鈴木　佑佳

今年度から、聖路加看護大学１年生の希望者は、一般教養科目の一部を特別聴講学生として立教大学で受講できるようになりました。私はその一期生にあたり、幅広く学ぶよい機会になると思い、受講することに決めました。

立教大学の第一印象は、とてもすばらしいものでした。何よりもキャンパスが独特で、歴史を感じました。クリスマスのイルミネーションも見事だということを聞いたので、その時期にもぜひ、キャンパスへ足を運びたいと思っています。聖路加看護大学は単科大学なので、人数も少ないため、立教大学では、人の多さにも驚きました。

私の受講した科目は「宇宙の科学」と「心の科学２」です。両方とも、とても興味深い内容で、受講して本当によかったと思っています。「宇宙の科学」は、聖路加看護大学にはないような内容でしたので、よい経験になりました。「心の科学」では、これからの学習へつながる、興味深い内容を学ぶことができました。

立教大学の学生が、聖路加看護大学で学ぶことは、現段階ではできないようですが、可能になればいいと思います。講義の体験とともに、様々な環境で学ぶことはとてもよい機会になると思います。そして、単位互換制度をきっかけに、立教大学と聖路加の関係が、より一層発展することを願っています。

聖路加と立教

聖路加看護大学１年
西岡　沙織

立教大学で授業を受けることができるということで、はじめに抱いた期待は、総合大学の雰囲気を味わえるのではないかということだった。聖路加は単科大学なので、その違いを感じることができれば、よい経験になるのではないかと考えたからである。

まず良い点として感じたのは、総合大学では接触する人間の数が多いため、自分がどういった人間かを知ることができるであろうということである。また、様々な考え方に触れることで、自分の考えを深め、視野を広げることができるだろうということである。単科大学ではどうしても、全員が同じ目標を持っているためか、一人一人の考え方も似ているような気がする。よって、人との摩擦も少ないし、団結力が強い。これは単科大学の良い点でもあり、悪い点でもあるような気がする。

次に、悪い点として感じたのは、立教大学では授業中の私語が聖路加より多いということである。やはり、人数が多く、教室が広いためであろうか。

今回、立教大学で授業を受けることで立教と聖路加のそれぞれの良い点、悪い点を発見することができ、そして聖路加での自分の生活を見直すことができた。そういった意味で、短い期間だったが、立教で過ごした時間は私にとってよい経験になったと思う。

立教大学での生活

聖路加看護大学１年
豊田　陽子

今年から、特別聴講学生として立教大学の授業を受けることになった。前期のみという短期間ではあるが、私にとっては大変よい経験ができたと喜ばしく思う。

私の通っている聖路加看護大学は、看護学部のみの単科大学であり一学年 80 人という小規模な大学である。ですから、総合大学である立教大学の授業を大勢の生徒と共に受けて、新鮮な感覚を覚えた。

また受講した講義はとても興味深いものだった。私は「心の科学２」と「人類の科学１」を選択し、特に前者は“心の健康を考える”という点で看護に通じるものがあり、毎回の講義を楽しみにしていた。また後者では、ヒトの起源・進化・拡散をテーマに分かりやすく、モニターを使用したり、先生の実体験を混じえて説明してくださり、とても面白かった。

このように、全く違った環境の中で勉強する機会を与えて下さり、ありがとうございます。これからは、立教大学で学んだ幅広い教養を自分の進む道の中に生かしていければよいと思う。

立教の授業に参加した聖路加看護大の学生の皆さん

デジタル映像教材作成の実際

中国語教育研究室主任
舛谷　鋭

メディア教育開発センターが実施しているマルチメディア利用実態調査＜http://www.nime.ac.jp/~mana/project/Multimedia-Utilization/report_index. html＞によると、高等教育機関のマルチメディア利用率は、インターネットによる教材提供とメールによる課題提出が5割以上、パワーポイントなどのプレゼンテーションが6割以上という。映像系では録画ビデオの授業利用が8割で、ビデオカメラの利用が5割弱、マルチメディア教材作成が 4 割弱というのが目をひく。 本学でも自由選択科目「ビデオ制作で学ぶ英語」や、授業中のプレゼンを DV カメラで記録する試みがすでに行われている。ここではメディアセンター設置の機材を利用し、デジタル映像教材を作成する手順を紹介したい。

近年 DV カメラが普及し、放送に耐える素材が手軽に撮影できるようになった。一般用 DV カメラは音声が弱い場合もあるので、必要に応じて録音室でMDかDATに音声素材を用意する。

こうした素材を、全カリ予算でマルチメディア実験教室(8401) に2台設置されているビデオ編集パソコンに取り込む（教職員のほか、準備室への科目担当者の申し出により学生も利用可能)。IEEE1394 ケーブルで DV カメラを接続し、ハードディスク、本体の順に起動する。音声素材があれば、別に前面のオーディオ端子に MD などを接続する。

ビデオ編集ソフトの操作画面

ソフトを起動し読み込みボタンを押すと、DV カメラが回って素材が取り込まれる。早送り、停止などもソフト側からコントロールできる。DV 形式の動画データは1GB 当たり約5分で、本機はおよそ6時間分の素材を蓄積できる。図の右上が取り込み動画のまとまり（クリップ）で、ここから下の帯にドラッグ＆ドロップして配列するのが編集の概要である。左上は選択クリップの再生モニタだ。デジタル編集では動画、音声の切り張りや特殊効果、タイトル作成が、まるでカードを並べかえるように簡単にできる。ソフトの操作は直感的だが、撮影テクニックや編集プランを含むマニュアルも準備室に用意されている。

不要な部分を削除する程度のカット編集なら、素材の2倍くらいの時間で終了する。編集結果は「ファイルームービーの書き出し」でミニ DV テープに保存できる。ビデオ編集は最初は予想以上に時間がかかるものだが、作業途中の素材はミニ DV テープに書き出しておくか、CD-R に分割して保存しておくとよいだろう。

できあがった教材はミニ DV テープのまま、あるいは準備室で VHS に変換すれば一般教室でも再生可能だ。しかしせっかくデジタル編集した教材だから、DVD を作成すればより便利だ。アナログメディアと違って頭出しが容易で、VHS で免れない再生立ち上がり時の音消えもない。

記録型 DVD は現在デファクト争いの真っ最中だが、一回のみ書き込み可能な DVD-R が DVD-RAM や DVD-RW に比べて読み出し互換性では優れている。DVD ビデオ作成用の DVD-RAM/R ドライブが教材準備室に2台設置されていて、ミニ DV テープに保存された動画素材から、DVD プレーヤーで再生可能なディスクを作成できる。メディアは 4.7GB で 120 分の DVD 規格動画（MPEG2 形式）が記録できるもの（1000 円程度）を用意する。ドライブに付属のソフト DVD-Movie Album で DV 形式のファイルを MPEG2 形式に変換し、オーサリングソフト (DVDit! LE) で DVD-R ディスクに書き出すのが作業の流れだ。簡単な編集も可能だが、ビデオ編集は実験教室で行い、DVD 作成のみ準備室で行うのが今のところ安定した環境のようだ。

教材準備設備については利用の多寡が機器、サポートの充実につながる。デジタル映像教材の編集、作成をぜひ一度試みていただきたいと思う。

2001年度英語海外文化研修レポート

特別な生活から普段の生活へ

2001年度英語海外文化研修随行員
立教大学大学院英米文学専攻前期課程2年次
池上　俊彦

昨年の夏、私は、米国ミネソタ州におそよ1ヶ月間、学部生49名とともに滞在した。この研修旅行は、大変実りのあるものであった。半数以上の学生たちは、海外体験が初めてであったにもかかわらず、大きな事故や問題が皆無であったし、研修後のアンケートでは、学生の90%が満足していると言ってくれた。なによりすべての学生がこの研修を楽しんでいた。この成功は、今回で5年目を迎えるこのプログラムにおいて、毎年の反省から研修内容についての検討と改良が、立教大学のスタッフとミネソタ州ベセル大学のスタッフとの間で、着実に行なわれてきている、そのたまものである。

ミネソタ州ベセル大学での、およそ1ヶ月にわたるESLの授業は、1週間ごとに設定されたテーマにもとづき、またその時々のフィールド・トリップに即した内容をマテリアルにした授業がなされた。そこにはまさに、学びと遊びの効果的な相互関係があった。学生たちは、知識を吸収するのみでなく、こちらからも情報を発することではじめてコミュニケーションが成立するということを、きちんと理解していたし、教室の中においても外においても、コミュニケーションを積極的に楽しんでいた。

ホスト・ファミリーとの交流も素晴らしい体験であった。この研修が終わればそれでおしまいということではなく、多くの学生たちは、これからもホスト・ファミリーたちとの交流が長く続いていくであろうと思われるほど、よい関係を築くことができた。

ESLクラスとは対照的に、ほぼ毎日行われたレクチャーやそれをもとに行われたパネル・ディスカッションについては、手放しでよいことばかりではなかったと思う。レクチャーの各講師は、大学で教鞭をとっているスタッフばかりでなく、地域のソーシャル・ワーカーのみなさんがミネソタでのボランティア活動を紹介したり、同世代にあたるベセル大学の学生たちが、アメリカの大学ではどんな学生生活を送っているのかを話してくださったり、興味深く刺激的なものであったことはまちがいないが、そもそも「文化研修」ということで、トピックの多くはアメリカが持つ多様性がどのように個別に尊重され、かつ吸収統合されつつ成長発展しているのかという面ばかりが語られていて、例えば人種差別やマイノリティー・グループの歴史や生活様式についてのレクチャーが多すぎたように思われる。そのようなトピックに対して、はたして学生が本当に興味関心を持って聞いていたのだろうか。18歳、19歳の典型的な日本人大学生が、日本で生活しているという普段の生活感覚から、どれだけ差別やマイノリティーに関心を持っているのであろうか。たとえば、立教のキャンパスには、多くの韓国人留学生がいるが、日本人の学生が彼ら彼女らにどれだけの興味関心を普段から示しているかは疑問である。普段、興味関心を持っていないところに、まだ十分に理解できていないかもしれない英語という言語でもって、90分間のレクチャーを聞くというのでは、少しばかり無理がでてくるのも当然であるのかもしれない。

これを改善するためには、事前研修で、学生に人種差別とマイノリティーについて興味を持ってもらうようなプログラムを組み込んでみることはいかがであろうか。日本では人種差別がどのように存在しているのか、それをどのように改善しようとしているのか。大きな問題ではあるが、いくらでも身近な視点から考えてみる、興味を持って関心をむけてみるやり方があると思う。例えば、立教のキャンパスにいるアジアからの留学生に日本におけるマイノリティーという立場から、日本について、そして立教大学について話してもらう機会を作るなどしてみてはどうであろうか。

あえて言えば、このような点が改善されると、さらによいプログラムになると思う。

大切なことは、それぞれの毎日の関心や考え方である。今日起きて寝るまで、何をどのようにするのかである。1ヶ月間のアメリカ滞在という特別な生活が、立教大学においての普段の学生生活に対して、どのように影響を与えつづけているかである。

全カリニューズレター　No.16
印　刷　2002. 2. 8　　発　行　2002. 2. 13
発行人　庄司　洋子
編集人　福山　清蔵／小沢　健市／下地　秀樹
発行所　立教大学
　　全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　神谷印刷株式会社